未来へいっぽっぽ

「沖縄嫌い」

打越 正行（社会理論・動態研究所）

私は今までに沖縄の暴走族やヤンキーの若者に聞き取り調査をしてきた。そこで出会った若者の多くは、ゆいまーるとは異なる社会に生きていた。そのような若者がいることを記録していきたい。

◇　◇

2007年7月の平日深夜。北部出身の拓也（仮名）は、中部のバイク仲間とゴーパチを走っていた。ガラス工場や離島の農家での仕事を経験して21歳、運送業に就いた。毎日、北部の実家から浦添の会社まで通いながら、夜はバイクでツーリングを楽しんだ。

拓也　北部は（中南部より）もっと仕事がない。今のところは給料いい。

―いくらなの？

拓也　6千円。

―だけど家から燃料入れて通ったり、弁当買ったりしてたら、4千円くらいしか残らんやん。

拓也　しかたないさー、それでも他よりいいのにー。（地元の中学は）合わなかった。同窓会行くけど、面白くない。上の世代とも面白くない。シカトされたり、見てないふりしたりされる。地元だと先生、警察より先輩が怖い。いじめもあったし。○○の人は心が狭い。考え方が幼い、幼稚。ずっと根に持つし…。だから、ここで働いているわけよ。北部楽しくない。仕事ないし、沖縄嫌い。人も嫌い。

―地元でエイサーはしてなかったの？

拓也　エイサーは強制だった。エイサーも嫌。（練習に）来なかったら死なされる。先輩がいばってるのがいちばん嫌い。つぶれかけたこと何回もある。

―そんな時どうするの？

拓也　何もしない。（その時）いなぐーがいたら、いなぐーと会う。だからいなぐーいない時はきつい。仕事頑張ってるつもりなのに、やる気なしって言われるとむかつく。しょっちゅうこんな。

（離島で働いていたとき）やる気ないって言われて、離島手当てカットされた。初めての仕事で、分からなかっただけでやる気ないって言われた。けど、先輩がおごってくれて、チューハイ飲んだ。「あんな言われてるけど、辞めんなよー」って、「お前辞めたら、近い年いないから、へんなどー」って。

基地とか、分からん。明日も7時から西原で仕事だから、そろそろ行こうね。

未来へぽぽいっぽ

打越 正行（社会理論・動態研究所）

「おれにはできる」

2007年ゴーパチ沿いのコンビニ。勝也（仮名、以下同様）は中3だった。

◇

勝也　学校は行ってん。担任の若いのくるした。（その時）警察呼ばれたよや。

―なんでキレたん？

勝也　違反のズボン履いてってから、そいつに注意されたわけよ。それで、学校行かんくなったけど、久しぶりに行ったら「何しに来たゴミ」って言われて、それでキレて先公殴って、椅子投げた。

―中学ん時は何してたん？

勝也　普通に働いてたよや。（同級生の太田に向かって）なあ？　俺たち、現場で毎日ちゃー殴られーよ。

―ヘマしたから、やられんの？

勝也　うーんん。班長は現場に普通に酒飲んで来て、理由もなく算木（木の棒）でちゃー殴り。体中、常にアザだらけで、あの頃よく女に心配されたよ、やー（笑）。

―理由もなくやられんの？

勝也　そう。目の前にいるだけでやられる。太田なんて腸炎で（仕事）休んでちゃーくるされよ。だけどその班長はいい人だった。俺たちの気持ちも分かってくれるばあよ。

◇

ある晩、中卒で働くことを宣言した勝也に向かって、一つ上の先輩は、自らの経験を語り出した。

先輩　俺もバイク乗れると思ったばあよ。働いてみ。自由になれん。働かんと周りから変なに見られるし。高校行っとけばよかった。学校のつまらなさなんて、仕事のきつさと比べれば、何とでもなるばあよ。学校がつまらんかったら寝とけばいいやし。

◇

先輩の経験した現場のきつさは、学校のつまらなさをはるかに超えるものであった。そのきつさの対価として得た賃金も、夢見たバイク免許の取得や購入には到底及ばなかった。自らの見当違いを素直に後輩へ伝えようとした。しかし、勝也にはまったく伝わらなかった。彼は「俺にはできる」の一点張りだった。2007年にそのように語っていた彼は、その後、一人前の鳶となった。そして今日も現場に向かう。

未来へぽぽいっぽに

もうひとつのゆいまーる

打越 正行（社会理論・動態研究所）

2014年9月、上地（仮名）は父、母、兄、兄の友人の5人で同居していた。父と兄は建築作業員で、上地も違う会社の建築作業員だった。父は愉快な人で、夜中に民謡を歌っていた。母は現場で軽作業をしていたが、腰を痛めて当時は家事に専念していた。

◇　◇

暑さの残る夜10時すぎに先輩従業員と上地の家に向かうと、兄が自宅で大暴れした後だった。70代の母と60代の父が殴る蹴るの暴行を受け、冷蔵庫は扉が外れていた。上地が仲裁に入って兄は落ち着きを取り戻し、部屋に戻っていた。

3日前から父は近くの公園で泡盛を飲んで帰って来なかった。この日の夕方に久しぶりに帰って来ていきなり息子に殴られた。兄の暴力は頻繁にあり、パトカーと救急車が家の前まで出動したこともある。上地によると、暴行のきっかけは、仕事から帰って来た兄の夕飯の準備を母が忘れていて、それで兄がブチ切れて、父と母に弁当をコンビニへ買いに行かせたら小さい弁当しかなくて、それを見た兄はまたブチ切れて、冷蔵庫を破壊したという。上地は「携帯みたいに、バッカーンって。おかーが扉のない冷蔵庫、ガムテープでふたしてるんですよ」と、笑いながら話した。

上地は「（兄は）先輩とかとつながっていないから。30（代）にもなってしっちー大暴れして」と非難した。兄は地元のヤンキーグループに属しておらず、さまざまな抑制ルールを身に付けていないという。

上地は「冷蔵庫はすぐに買わずに親戚の集まりの時に見てもらって、買ってもらうのがいい。それで反省させて、しかも買ってもらえたら、それでいい」と言った。この親戚とのつながりは、困っている人を助けるだけでなく、蔑みを含んでいる。そして上地はそれを利用して兄の行動を抑止しようとする。ここに「もうひとつのゆいまーる」がある。

未来へぽぽいっぽに

つなぎとめられるウットゥ

打越 正行（社会理論・動態研究所）

沖組（仮名。以下同様）は、100人近くの従業員を抱える型枠解体業である。康夫社長は、復帰前に内地へ出稼ぎに行った際、まだ明確に分業体制が取られていなかった沖縄の建築業界で、今後は型枠解体に特化した受注があると見込んで沖組を立ち上げた。仕事のノウハウは内地で身に付け、従業員は中学時代のウットゥを中心に集めた。現在では、息子たちのウットゥも働いており、2世代にわたり地元のウットゥは沖組で働いている。

◇　◇

沖組にはいろんな人がいる。中学時代に2回少年院に入った16歳の浩之、覚醒剤で何度も刑務所に入り、出てきたばかりのひろしにーに。2人が働く姿はとてもかっこいい。

社長「特別扱いしないよ。15歳なってここに来たら同じように働いてもらう。（従業員は）頭はバカだけど難しい仕事だよ。だから誇りを持って働けって言ってる」

◇　◇

ある年配の従業員に沖組で働き続ける理由を聞いた。

従業員「給料が毎月遅れずに満額出るさー。こんなとこ他にないよ」

他の会社では給料日に満額支払われない所もある。

社長「最近の若いの見ても義理人情がない。前借りさせてる。悪さしたらいけんさ。バイク買うためにしっかり働かんとって。若い子らはすぐ辞めるけど、それも織り込み済み。他の仕事、会社に行っても結局戻ってくる。きちんと給料を給料日に支払う仕事はそれだけで売りになる。他は未納、遅延ばかりだろ」

◇　◇

社長は従業員の行政罰による罰金も肩代わりする。罰金を納められない場合、那覇の労役所で3カ月働くことになるが、社長はその30万円を肩代わりする。従業員は借金を返すために沖組で働き続ける。ウットゥたちは肩代わりしてもらってから5年近くたつが、生活に余裕がなく、借金はいまだ返済できないままだ。

未来へ いっぽっぽ

ローカル・ギャンブル

打越 正行（社会理論・動態研究所）

「ソロ」というトランプゲームがある。沖縄の各地で独自のローカルルールが作られながら、ギャンブルとして発展してきた。

建築現場の昼休み。従業員はトランプを囲んで一喜一憂する。ビーチパーティーや忘年会でも、いつものシージャーが一人勝ちするまでウットゥたちは帰れない。ギャンブルを断る理由として「お金がなくなりました」も不十分である。そこらへんで、シージャーから「だー、ジン貸すよ。いくらいる？」と声がかかる。中学時代に金銭せびりをしていたシージャーが、奪うのではなく必要な時に貸してくれる姿は「優しい」との錯覚に陥る。ちなみに利子の相場は1カ月1割であった。

結果として、一晩でウットゥたちの所持金のほとんどがシージャーの財布に収まる。シージャーはそのお金で時々ウットゥたちを飲みに誘う。不釣り合いながら、持ちつ持たれつの循環がある。その様子はまるで「鵜飼い」のようである。いつもやられるウットゥたちは、自分がその晩に財布にいくら入れて、いくらまで借り入れするのか、事前に明確に決めてから参加するようになる。結果として、ウットゥたちは自分の稼ぎと生活資金を意識する金銭感覚を身に付けていく。

◇　◇

沖組（仮称）の従業員は、その半数近くが給料日前の前借りを行っている。毎日のように前借りすることで、同じ班の従業員は、誰が今いくら持っているかをお互いに把握している。それゆえに、若い従業員はギャンブルを断れない。このようにシージャーたちは、地元の人間関係やその移動を、お金の流れやパターンで把握し、囲い込む。ただしそれによって、金遣いが荒いウットゥは、なにか危ないことをしていないか、暴力団とのつながりがないかなどを身辺調査される。ウットゥを守るため、言い換えれば自らのウットゥを手放さないためにである。

未来へぽぽいっぽ

打越 正行（社会理論・動態研究所）

「給料袋」とヤンキー文化

中里（仮名。以下同様）「昔（中学に通っていた頃）とかでも、でーじまじめに生きてきた人間とかいるさあ」

―「はいはい」

中里「俺なんかはこんなってやんちゃしてるさあ。夜は遊んだり、酒飲んでたばこ吸ってみーみ（みたいなこと）するの、あったーからしてみたら、本当はうらやましいやんばあて（と思うわけ）、自由に生きてうらやましいなあって思ってるばあよ。だから昔ってなんかやんちゃ坊主がモテるばあて」

―「ですねえ」

中里「確実やんばあて。でも今となっちゃーよ、前から努力してるから、いい仕事就いて、人生逆転さ。あんし大人なってからの人生の方が長さんばーでて（長いだろ）」

譲司「うん」

―「そうですかねえ」

中里「やんちゃしてる時までは10代までさ、このはたち以降からは」

彼らは10年近く建築業で働いてきた。2012年の旧盆中日の夜、彼らは地元の青年団で活動することもなく、エイサー見物のためにコンビニの駐車場にいた。そこで「今となっては人生逆転」と嘆いた。

◇　◇

沖縄県の建築業界は、投資規模がピーク期の3分の2に縮小した。彼らの給料袋も薄くなり、後輩たちの面倒を見切れなくなった。夜遊びやたばこ・酒が、真面目な若者たちと自分たちとの違いを表すアイテムではなくなった。ヤンキーとしてのプライドも簡単には築けない。青年団からの直接の誘いもなく、学校との距離も遠い。のちに彼らは酒や暴力トラブルも増え、ますます孤立していった。

ここから、何かと楽観的に見られがちな「やんちゃな若者たちのもうひとつの社会」は決して安泰ではないこと、そして「沖縄のユイマール」は、彼らの生活までは届かないことが分かる。彼らの生活を支えるのは、そのどちらでもなく、まずは「給料袋」の厚みである。そして、それが薄くなった背景には、内地ゼネコンとの不平等な関係や沖縄への差別的な処遇がある。